

風呂から何から全部電気／背が高く、格好良かった

在りし日の白洲次郎

運動進める NPO法人 交流あった岸さん(山)に聞く

蔵王の「山荘」復元へ

白洲次郎が山形市蔵王温泉スキー場に所有していた山荘「ヒュッテ・ヤレン」の復元・保存を運動している東京のNPO法人「元気・まちネット」の矢口正武代表理事(64)＝東京都渋谷区、戸沢村出身＝が、白洲と交流のあった蔵王ハイムスキースクール会長の岸英三さん(89)＝金山町金山＝を訪ね、その思い出などを聞いた。岸さんは「山荘は風呂も電気(式)だと白洲さんは言っていた。招かれて肉やチーズを(ち)そうになった」などと話した。

白洲次郎(1902～85年)は戦後の混乱期に日本国憲法の草案作成に携わり、連合国軍総司令部(GHQ)と渡り合った。51(昭和26)～59年には東北電力の初代会長を務め、蔵王が気に入って山荘を建てたという。

「まちネット」は老朽化が進む山荘の復元に動いており、白洲と交流のあった人たちから当時の話を聞いていた矢口さんが22日に岸さんの自宅を訪ねた。岸さんは昭和30年代に白洲と蔵王で出会い、ヒュッテ・ヤレンに招かれるようになった。電力事業を推進した白洲の山荘はオール電化に近い建物で、「風呂から何から

全部電気だと白洲さんは言っていた。電氣代を聞き、高くて驚いた記憶がある」と岸さんは振り返る。「白洲さんは奔放だが、字で言えば楷書のようにきちんとした性格だった。背が高く、黒っぽい服が好きで格好が良かった」

岸さんはその後、オーストリアでスキーの指導法を学んだ。「欧州では(リゾート地の)地名の看板は出ているもスキー場とは書いていない。蔵王はスキーに集中し過ぎた。四季を通じて人が集まるようになればいい」と岸さん。矢口さんは「通年観光の魅力を高める蔵王の資源としてヒュッテ・ヤレンを活用してほしい」と語った。



蔵王温泉スキー場での思い出などを語る岸英三さん(左)と矢口正武さん
＝金山町

Q ヒュッテ・ヤレン 白洲次郎が蔵王に建てた山荘。木造2階建てで約70平方メートル。2階に玄関と方ウンター付きの台所兼居間、1階に小さな寝室3部屋などがあるが、創建当時は1階が仕切られておらずリビングになっていたという。「元気・まちネット」が昨年、建物を調査するなど復元・保存に乗り出し、改修に向けた募金運動を開始した。